

小屋の中で～キャリーとロボットの夢～

敦賀市立栗野小学校

五年

野崎裕也



各務原市立尾崎小学校

五年

中島礼

鈴木咲江

高橋洋人

立田フアテイマ 咲芙那

野口琴音

アメリカ、ガロリラ州に、一人の少年がいた。少年の名前はキャリア・バー
トン。勉強はまあまあ。スポーツはいまいちのふつうの中学生。彼は、学校の
野球部に入っている。しかし、二年生になってもキャッチボールもろくにでき
ず、一年生と混ざってずっと雑用係だった。

ある日、野球の練習が終わり、帰る途中、小さな古びた小屋を見つけた。キ
ャリーは調子にのって小屋をのぞいた。すると、吸い込まれるように意識を失
ってしまった……。

気がつくのと林の中にいた。なぜか体が軽い。なんだろう、この感じは。キャ
リーは不思議に思った。

(ここは、どこだろう)

まあ、そんなことはどうでもいい。とにかく、ここからぬけ出そう。

すると、明かりが見えてきた。

(よかったあ。助かった)

ところが、そこは見たこともないグラウンドだった。キャリアは、ぼう然とした。学校のグラウンドとは明らかに違うし、気持ちもいつもと何か違う。

(なんなんだろう、この気持ち。野球がしたい)

こんなふうに、初めて思った。

しばらくすると、めがねをかけた少年がやってきて、こう言った。

「今日も楽しく練習しようぜ」

生まれて初めて言われた。初めて会ったのに自然に、

「うん」

と言葉が出た。その後も、どんどん部員が来た。特に印象に残ったのは、ロン毛のロバート君。

(名前まで覚えちゃった)

いつの間にか練習が始まっていた。キャッチボール、トスバッティング、フリーバッティングが終わり、ついに地獄のノックの時が来た。

意外とみんな下手だ。キャリアは少し安心した。

（なあんだ、みんなぼくと一緒ぐらいの実力だ）

みんな下手だと少し笑ってしまいが、これで自分の実力がよく分かった。こうして毎日練習しているうちに、キャリアは今までとは違う感情が出てきた。（野球ってこんなに楽しいスポーツだったんだ）

キャリアは感動した。

その日の野球の練習が終わった夜、部員で祭りに行った。そして、みんなが集まって花火を見ていた。

「きれいだな」

とロバート。

「そうだね」

とキャリア。やはり、この世界は最高だ。ずっとここにいたい。キャリアは強く願った。花火を見ていると、ねむたくなってきた。

(ふあゝ)

いつの間にかねてしまった。

目が覚めると、強い日差しで目の前がまぶしい。教室だ！

(ぼくはいねむりしていたのか……)

「ええと、じゃあキャリア君、教科書のここを読んでみて」

いきなり先生にあてられた。

「えっ、ああと、ええと……」

「分からないんですか。じゃあ、ロボット君、読んでください」

と先生が言った。

(ロボット?)

キャリアは、ロボットに顔を向けた。あのロボットほどではないが、だいぶかみが長い。

(ロボットは、あの世界のロボットと同じやつなのかなあ)

授業が終わると、ロボットがぼくの席に向かってきた。

「あのう、きのう夢でキャリア君と一緒に野球してたんだけど、野球って楽しいんだね」

キャリアは言葉が出なかった。

（あれは現実だったのか、それとも夢だったのか）

まあ、そんなことはどうでもいい。あと一分で部活が始まる。

（やばい、おくれる）

急いで行った。

（はあ、間に合った）

練習が始まった。今日はボールがよく飛ぶ。しかも、かたが軽い。

（なんか、今日は調子がいいな）

そして、ノックの時間になった。なぜか今日は難しい打球がよく取れる。キャリアはノックが楽しくなってきた。そして初めて気がついた。

(野球は楽しむスポーツなんだ)

キャリアーは笑顔を忘れず練習した。

「今日は調子がいいじゃないか」
とかんとく。

キャリアーは練習が終わってから、もう一度あの小屋へ行ってみた。しかし、そこに小屋はなかった。

(あーあ、ありがとうって言いたかったのになあ)

キャリアーは半信半疑な気持ちで家に帰った。キャリアーは、お風呂に入っている時、大事なことに気がついた。

(明日は全国大会予選。がんばるぞ)

キャリアーは早くご飯をすませて、六時半にはねむりについた。

そして、全国大会予選当日、キャリアーは朝五時に起きた。太陽の日差しがまぶしい。食を早くすませて決戦の場に向かった。ついにその時が来た。相手は、

練習試合で一對○で負けているカルベルブレイカーズだ。

いよいよプレイボール。★

ぼく達のチームの名前は、ガロリラシヤークス。

ぼくの守備はセンター、打順は六番だ。一回は両チームとも○点だったが、二回表、相手チームに一点とられた。そして、二回のうらで、ぼくの打順が回ってきた。しかし、空振り三振。

ぼくはイライラし、これをきっかけにチーム全体も団結力がなくなってしまう。

三回と四回は両チームとも○点だった。五回にカルベルブレイカーズは一点追加し、ぼく達ガロリラシヤークスは、一点もとれなかった。

ぼくが一生懸命打とうとしているのに、もうあきらめているのだろうか、チームメイトは。ぼくがイライラしていると、

「野球は楽しむスポーツだぞ」

とつ然かんとくが言った。この言葉を聞いて、ぼくは、あの小屋での野球のことを思い出した。

そうだった。そういえば、あの小屋の中でも、同じようなことがあった
つけ。

あの時やっていた練習試合でもぼく達のチームはぼろ負けで、ぼくはすぐくイライラしていたんだ。その時、ロバートが、

「野球は楽しむスポーツだよ。もう一回『野球』をやろうよ」と、はげましてくれた。もう一回、あの言葉を思い出すんだ。

「そうだ。野球は楽しむスポーツなんだ」

七回にも相手が一点取り、これで点数の差は三点になった。

九回うらになったその時、ぼくはすごいものを見た。それは、小屋で見たロバートだった。しかも、ロバートは相手チームのピッチャーだったの

だ。びっくりした。ぼくは、打つことに夢中で気づかなかったのだ。

ふいに、ロボットと目があつた。小屋の中とは違い、ロボットの目はこわかった。「絶対押さえる」という目だ。

ぼく達のチームの打順は一番からで、一、二番はアウトになった。三、四、五番はヒットを打ち、るいに出た。これで満るいだ。

そして迎えたぼくの打席。

一球目はカーブで、空振りになった。ストレートが来ると思ったが、うらをかかれた。二球目はストレート。見送ってストレイク。ぼくは、いきなりロボットに、ツーストライクと追い込まれた。

だが、ロボットの次の三球は全部ストレートで、ボールだった。

次の二球は、シュートとチェンジアップで、打ちにくい球を投げってきた。ぼくはファールでねばった。

そして迎えた八球目。ロボットはど真ん中に投げってきた。ぼくは、バッ

トを思いつきりふった。

バットに当たったボールは、スタンドに飛んでいった。見事満るいホームラン。サヨナラ勝ちだ。

チームのみんなはベンチから出てきて、「オーツ！」

とさけんだ。ぼくは両手をあげ、チームメイトの顔を見て、

「やったー！」

とさけびながらるいを回った。ホームインしたぼくを、チームのみんなは胴上げした。

胴上げの時、ロボットの顔を見たぼくは「はっ」とした。

ロボットのこわい目が笑顔に変わっていた。

試合の後のあいさつで、ロボットがぼくに言った。

「負けたけど楽しかった。また、やろう」

ぼくは、うれしくて言った。

「うん。ぼくも、最高に楽しかった」

ロボットとぼくは、にこりと笑った。

その後、ガロリラシャークスは、全国大会予選を一位で突破し、全国大会準優勝で幕をとじた。

キャリアは、準優勝という結果以上にすばらしいものを得ることができた。それは、失敗したときははげまし合い、成功したときはみんな喜び合えるチームメイト。

このチームメイトがいるからこそ、協力し、がんばり合えるのだ。そして、野球は一人でやるよりも、みんなでやる方が断然楽しい。キャリアは、本当の意味での野球の楽しさを知ったのだ。

キャリアは、今までよりもっと野球が好きになった。これからも、キャリアは野球を続けていくことだろう。

小屋の中で～キャリーとロボットの夢～